白山の自然誌　44

白山の秘湯・中宮温泉の歴史

2024 年 3 月

石川県白山自然保護センター

はじめに

中宮温泉は、白山市中宮の中宮展示館（中宮温泉ビジターセンター）近くに位置する温泉です。その効能から「胃腸の霊泉」として親しまれ、古くから湯治の場となってきました。毎年 11 月下旬から 4 月中旬までは多い時で 3 ～ 4 メートルの積雪におおわれアクセス道路が通行止めとなり、旅館等が閉鎖されるため、温泉が利用できるのは春から秋の間だけとなります。

温泉の起源については、2 つの説があります。一つは白山開山の祖と言われる泰澄大師が谷川で白い鳩を見つけ、その近くに湧き湯を見つけたという説と、もう一つは、出作り耕作（焼畑など）を行うために山奥に分け入ってきた村人が白い鳩を見つけ、その下から湯が湧いているのを見つけたという説です。いずれの説でも、白い鳩が湯の手掛かりになっており、そのため中宮温泉は別名「鳩の湯」「鳩谷の湯」とも呼ばれています。

長い歴史のある中宮温泉ですが、その歴史については吉野谷村村史等で断片的に紹介されているだけで、体系的にまとめられたものがこれまでありませんでした。そこで、本冊子では、吉野谷村村史の記載や中宮温泉の関係者から提供頂いた写真、新聞記事などをまとめ、中宮温泉やそこへ至る道の歴史をまとめました。この冊子を通じて、中宮温泉の自然と人々の生活の息吹を感じていただけたらと思います。

図1　中宮温泉の位置

表紙
中宮温泉の温泉街
裏表紙
小松砂丘（こまつさきゅう）「中宮八景」
（西山旅館1階に展示）

もくじ

1. 中宮温泉について（温泉街と効能）…… 2
2. 尾添の湯から中宮の湯へ（安土桃山時代～江戸時代前期）…… 4
3. 険しい道と温泉の衰退（江戸時代中後期）…… 6
4. 温泉旅館の誕生（明治時代）…… 8
5. 何度も場所を変えた温泉旅館（大正時代～昭和戦前期）…… 10
6. 小松砂丘が愛した中宮温泉（昭和戦後期）…… 12
7. 車道の開通と旅館の隆盛（昭和中後期）…… 14
8. 温泉街の衰退、そして試練を越えて（平成末期～令和）…… 16
9. もう一つの秘湯「親谷の湯」…… 18

1．中宮温泉について（温泉街と効能）

山々に抱かれた温泉街

中宮温泉は白山一里野温泉からさらに約 6km の奥山に位置しており、白山白川郷ホワイトロード（無料区間）が唯一のアクセスルートとなります。中宮展示館（中宮温泉ビジターセンター）から少し上流へ行くと道が二股に分かれており、右折して坂を上っていくと中宮温泉の駐車場が見えてきます。周囲を険しい山々に囲まれた「湯の谷」に沿って旅館が立ち並び、令和 6（2024）年現在、3 軒の旅館※1 が営業しています。

旅館の奥には中宮温泉組合などで共同管理する露天風呂「薬師の湯」があり、足湯や露天風呂を楽しむことが出来ます。その奥には薬師堂があり、御本尊として薬師如来が祀（まつ）られています。

また、露天風呂の対岸には道が続いており、その先は白山山頂（御前峰）への最長ルートである、ブナ原生林が広がる中宮道へ通じます。

図2　中宮温泉の温泉街の配置図
（国土交通省金沢河川国道事務所提供の地形図を加工して作成）

写真1　くろゆり荘と猿ヶ浄土山

写真2　中宮温泉の薬師堂

※1　西山旅館（愛称：にしやま旅館）、くろゆり荘（愛称：湯宿くろゆり）、木戸旅館の 3 軒。

温泉について

源泉は薬師堂よりも上流の山際にあり、泉質はナトリウム塩化物炭酸水素塩泉※2 です。約 63℃※3 の温泉が毎分 130 ～ 140 リットル湧きだしており、各旅館では源泉かけ流しで温泉を楽しむことが出来ます。胃腸に良いと言われており、古くから「胃腸の霊泉」と呼ばれ、湯治の場として利用されてきました。

また、中宮温泉は入浴するだけでなく、飲用することで効能が高まるといわれています。味はほんのり塩気の効いた味で、そのまま飲んでも美味しく飲めるだけでなく、お粥や温泉卵を作る際に使用すると味が沁みて、食塩なしで美味しく食べることができます。温泉街には湯を汲むための蛇口も整備されており、ペットボトルやポリタンクを持参すれば湯を持ち帰り、家庭で温泉水を楽しむこともできます。

飲用に適することから商品開発も行われており、西山旅館では温泉卵やおかゆ、温泉化粧水等が販売されている他、くろゆり荘では温泉水に炭酸を入れた温泉サイダーが販売されています。

写真3　中宮温泉の湯舟（西山旅館）

写真4　中宮温泉の温泉蛇口

写真5　西山旅館の温泉商品

写真6　くろゆり荘の温泉サイダー

※2　ナトリウムイオン（Na^+）、塩化物イオン（Cl^-）、炭酸水素イオン（HCO_3^-）を主成分とする温泉。
※3　源泉温度である 63℃は、様々なタンパク質食材（卵、豚肉など）が一番美味しく仕上がる温度とされ、低温調理においては「神なる温度」と呼ばれている。

2. 尾添の湯から中宮の湯へ（安土桃山時代～江戸時代前期）

安土桃山時代（戦国時代後期）の中宮温泉

泰澄大師が見つけたとも言われ、一説には1,300年余りの歴史があるとされる中宮温泉ですが、安土桃山時代※1より以前については資料が乏しく、詳しいことはわかっていません。

しかしながら、天正年間（1573～1592年）には浴場が整備された※2とされており、少なくともその時代以前には湯の存在がすでに知られていたと考えられます。

もともとは「尾添の湯」

現在では、中宮の温泉とされている中宮温泉ですが、尾添村（現在の白山市尾添）の支配下にあったことから、かつては「尾添の湯」と呼ばれていました。しかし、白山争論※3の結果、寛文8（1668）年に白山麓の村々が天領（幕府直轄領）になったのと同時に中宮村（現在の白山市中宮）と尾添の境界が現在と同じく中ノ川に定められ、温泉も中宮村の管理となったため、「中宮の湯」と呼ばれるようになりました。なお、温泉には現在のように管理者が常駐していたわけではなく、中宮村の集落で湯賃（入湯税）を支払って利用するという形態を取っていたとされ、この形態は明治時代まで続いたとされています。

図3　中宮村（白山市中宮）と尾添村（白山市尾添）の境界
（国土交通省国土地理院「地理院地図」に境界等を追記して作成）

※1　織田信長と豊臣秀吉が中央政権を握っていた時代。概ね1570年頃から1600年頃を指す。
※2　天正年間に別宮城主吉竹壱岐が、道、ゆざや、宿舎を作って営業を始めたとされている。天正2（1574）年に初めて浴室が設けられたとも。
※3　白山は加賀（石川）・越前（福井）・美濃（岐阜）の三ヶ国にまたがるため、その支配権をめぐる争いが起きていた。

（コラム）戦国武将も浸かった中宮温泉

幕末から明治期の郷土史家である森田柿園（1823～1908）が加賀国の地誌をまとめた「加賀志徴」には、戦国時代の中宮温泉に関する記載があります。加賀藩の藩祖とされる前田利家（以下「利家」）の家臣である村井長頼（以下「長頼」）が湯治に行ったと書かれており、それについて紹介します（以下、原文を記載）。

三壺記※1に、寛文八年白山麓公領と成たるよしを記して、尾添ノ湯を自今以後中宮ノ湯と申けりとありて、昔ハ尾添村の属湯にて尾添の湯と呼へり、亜相公夜録※2に、能州所口城※3廻り縄はり※4を、村井豊後と片山伊賀とに被仰付、其時豊後ハ尾添江湯治仕に付、伊賀一人ニて縄張せしよし見へたり

豊後とは長頼（通称：豊後守）のことを、片山伊賀とは長頼と同じく利家の家臣である片山延高（通称：伊賀守、以下「延高」）のことを指します。利家が小丸山城の建設を計画し、その設計を長頼と延高の二人に命じましたが、長頼は中宮温泉に湯治しに行っていたため、延高一人ですることになったという内容になります。

利家が七尾城に入城したのが天正9（1581）年、小丸山城を築城したのが翌天正10（1582）年とされるため、長頼はちょうどこの頃に中宮温泉に湯治に来ていたものと考えられます。利家も長頼も加賀国にも能登国にも元々縁はありませんでしたが、来てすぐに長頼が訪れるほど、中宮温泉は当時から有名だったのかもしれません。

図4　利家と長頼が入ってきた道

※1　利家の戦功や加賀藩の黎明期をまとめた史書。石川県指定文化財「加越能文庫」の一つ。
※2　利家（亜相公）の座談を村井長明（ながあき、村井長頼の子）がまとめたもの。亜相とは大納言（官職の一つ）の唐名（雅称）で、利家は大納言の官職を与えられたため「亜相公」とも呼ばれていた。
※3　小丸山城（七尾市）のことを指し、その周辺（七尾市中心部）は所口村と呼ばれていた。
※4　土地に縄を張って所有界や建物の配置などを定めること。城の建設の場合、本丸や堀の配置など、城の全体像の設計を指す。

3. 険しい道と温泉の衰退（江戸時代中後期）

中宮温泉への道

白山麓周辺が天領になったことで、中宮温泉への道は大きく変わりました。

天領となる前は、現在と同じように尾添村を経由して尾添川の左岸※1を歩き、中ノ川を渡って中宮温泉に向かう道でした。正保（しょうほう）4（1647）年の加賀国絵図ではそのようなルートが示されています。しかし、天領となった後の元禄（げんろく）15（1701）年の加賀国絵図ではこのルートが描かれなくなり、中宮村から尾添川右岸を歩いて中宮温泉へ向かうルートが示されるようになりました。

道の新設および維持管理においては加賀藩からの援助を受けており、湯ざや（浴槽）や湯小屋などを補修する場合の材木は中宮村内にある御林山（おはやし）※2の中から使用することや、湯の廻りの石垣や湯小屋の屋敷の破損、および湯元までの道の普請（ふしん）（工事）の場合には御普請小払銀（ごふしんこばらいぎん）（藩からの資金援助）がありました。

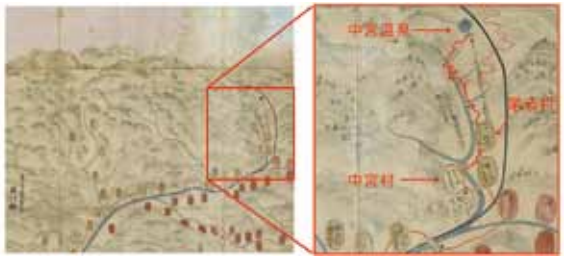

図5　正保4（1647）年の加賀国絵図
（正保4年加賀国絵図は石川県立図書館電子資料より引用）

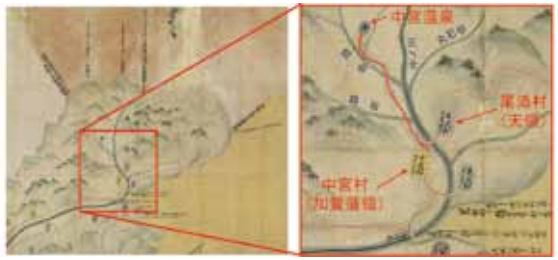

図6　元禄15（1701）年の加賀国絵図
（元禄15年加賀国絵図は石川県立図書館電子資料より引用）

※1　川の上流から下流に向かって左側の岸を「左岸」という。
※2　藩が所有する山林（藩有林）を指し、樹木の伐採や下草の採取などが禁止されていた。

厳しい自然環境、そして衰退へ

加賀藩から手厚く支援を受けており、名湯として評判の高かったと思われる中宮温泉ですが、遠隔地であること等により、江戸時代中期から幕末にかけて、徐々に衰退していきました。

中宮村は湯役銀（温泉資源に対する税金）を加賀藩に納めていましたが、そこからも衰退が見て取れます。湯役銀は寛文10（1670）年時では年に銀400匁（もんめ）※3とされ、湯賃（入湯税）として来客1人につき2匁を中宮村で徴収していました。しかし、明和（めいわ）元（1764）年には湯役銀は大きく減り、年20匁となりました。

また、文政元（1818）年に調査された「石川郡諸産物盛衰書上申帳」には「難路ニ付、当時入湯甚（はなはだ）衰微仕居申候」とあり、難路によって入湯者が次第に減少し、衰退してまったことが見て取れます。

※3　銀（銀貨）の単位で、1匁＝3.75gとなる。江戸時代において銀貨は重さによって価値が決まっており、金（小判）1両＝銀60匁程度とされた。2016年の米の価格（総務省統計）を基準とすると金1両＝63,000円となり、銀1匁＝2,100円程度となる。

コラム：ブナオ山観察舎から見える中宮温泉への道

当センターの施設であるブナオ山観察舎からは、対岸に横一直線に見える筋が見えますが、この道はかつて中宮温泉に向かう道でした。急斜面で雪崩や落石が頻発する場所のため、この道は毎年のように修繕に追われ、命がけで通行していたものと考えられます。聞き取りによると、三ツ又第一発電所直下の尾口第一ダムが完成し、昭和17（1942）年ごろに天端（てんば）※4の上を歩けるようになるまで、この道は使われていたとのことです。

写真7　ブナオ山観察舎から見る尾添川右岸と昔の道

※4　構造物の一番高い部分を指し、ダムや堤防では最上部の水平な部分を指すことが多い。

4. 温泉旅館の誕生（明治時代）

温泉街の誕生

江戸時代後期には衰退したとされる中宮温泉ですが、明治時代を迎えると勢いを盛り返し、ついに現地に管理者が常駐する旅館の営業が始まりました。

明治時代初期は簡易的な湯小屋を建て、江戸時代と同様に現地に管理者が常駐しない形態だったとされていますが、明治中期ごろには旅館営業が始まっていたとされています。

明治２（1869）年創業とされる西山旅館には、金沢市出身の文人で画家の小松砂丘（1896-1975）が記した「中宮温泉之記」があり、そこには「明治中頃西山山田木戸氏先づ旅舎を拵へ」と記されています。このことから、明治中期には西山・山田・木戸の３軒の宿があったことが示唆されます。

また、西山旅館には明治 29（1896）年に記された鑑定書※1 の木札や、明治 36 ～ 43（1903 ～ 1910）年の宿泊者台帳が残されており、これらからも明治時代から中宮温泉で旅館営業が行われていたことが伺えます。いずれの資料も同旅館の１階ロビーに展示されており、自由に閲覧することが出来ます。

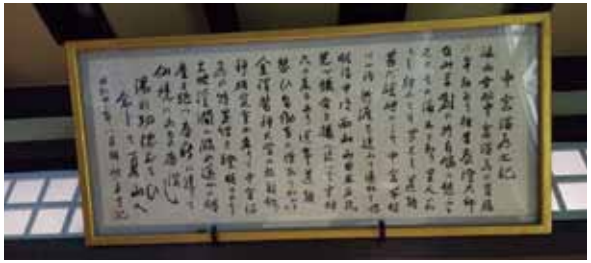

写真8　小松砂丘の「中宮温泉之記」

写真9　鑑定書の木札

写真10　明治時代の宿泊者台帳

コラム：明治時代の引札

引札とはチラシやビラ（広告）のことを指し、中宮温泉の引札も作られていました。この引札の内容を平たく言うと、「中宮温泉が新装され、食事や酒肴、寝具は不自由なく、尚且つこれまで道が悪かった場所はきれいに整備されている」ということになります。

壬申（「じんしん」または「みずのえさる」）とは、干支紀年法での年の表記で、明治時代前後では明治５（1872）年もしくは昭和７（1932）年を指します。食事も酒も出るというサービスの充実具合から、昭和７年に作成された可能性もありますが、文中の用語や描かれた人物の服装から、明治５年の作成とも考えられます。

もし明治５年の作成だったとすれば、明治２年創業とされる西山旅館の黎明期は、この引札に描かれているような様子だったのかもしれません。

写真11　中宮温泉の引札（山田旅館所蔵）

※1　石川県金沢病院（金沢大学付属病院の前身）が記したもの。「鉱泉医治効用」とは、温泉が医学的に治癒効果があるということを示している。

5. 何度も場所を変えた温泉旅館（大正時代～昭和初期）

中宮展示館付近にあった中宮温泉（大正時代～昭和初期）

大正時代、中宮温泉は一時期、蛇谷川の右岸（現在の中宮展示館付近）に温泉街がありました。

中宮温泉関係者への聞き取りでは、大正時代以前は現在の温泉街の位置より湯谷上流側（①）にありましたが、洪水により被災したため、下流の蛇谷川の右岸に移転（②）、しかし再び雪崩により被災したため、現在の場所（③）に移転したとされています。

また、昭和10（1935）年に出版された池上鋼他郎（いけがみこうたろう）著「白山連邦と渓谷」には、昭和7(1932)年8月に尾添川遡行（そこう）の途中で中宮温泉を訪れた際の記録が書かれており、ここでも大正時代前後にかけて中宮温泉の変遷が見てとれます（以下、原文）。

中宮温泉に三軒（山田、西山、木戸）の旅館がある、日を定め三日目毎に交代的に客引きをなす規定となつてゐる。何れも五年前※1に建築したもので、それ以前十三ヶ年蛇谷本流右岸に建つて居つたものなるが、土管湯送のため湯の温度低下し浴客に満足を与ふることが出来なかつたため中止となつたのであるが、目下中宮村十三軒の組合にて木管引湯によつて旧所旅館を建築せんとこれが工事に着手してゐた。（以下、略）

上記の記述より、大正3（1914）～昭和2（1927）年に蛇谷川の右岸に旅館が一時移転していたことになります。

なお、昭和9（1934）年8月※2には尾添川上流の大雨により洪水が発生し、木戸旅館の納屋二棟と旅館への温泉導管、周辺の道路や吊橋も被害を受けました。幸い死者は出なかったものの、木戸旅館は現在のくろゆり荘の場所に一時移転して営業を続け（④）、数年後元の場所に戻り再建されました。

この時代、中宮温泉は洪水に遭って移転しましたが、雪崩等により現在の場所に再移転と、自然に翻弄されつつも、場所を変えながらも営みを絶やすことはなかったのです。

写真12　大正時代の西山旅館

写真13　昭和7（1932）年頃の中宮温泉

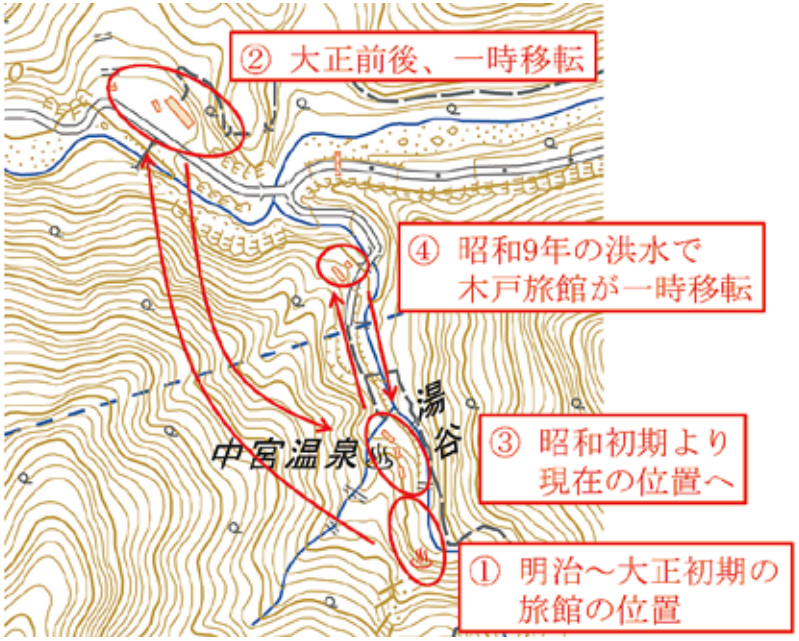

図7　大正時代～昭和初期の中宮温泉の温泉街の変遷
（国土交通省国土地理院「地理院地図」に変遷等を追記して作成）

※1　基準が昭和7年とすれば昭和2（1927）年と考えられるが、基準が出版年の昭和10年の可能性もある。
※2　白峰村域およびその下流が甚大な被害を受けた昭和9（1934）年7月上旬の大雨の1か月後に発生。梅雨時期の大雨で旅館より500メートル程上流で地すべりが起きて天然ダムが発生し、8月にそれが決壊したとも。
※3　昭和7（1932）年作成とされているため、その頃かそれ以前に撮影されたと考えられる。

6. 小松砂丘が愛した中宮温泉（昭和戦後期）

戦後の中宮温泉（昭和 20 年代）

太平洋戦争下では次第に客が減少した中宮温泉でしたが、その営みは途絶えることはなく、終戦直後の混乱期でも食糧を持参して客が訪れました。その多くは胃の病を患っている人で、戦争中は利用を控えていた人も、終戦後は藁（わら）にもすがるように中宮温泉へ湯治に来ていたのかもしれません。

中宮温泉は急峻な蛇谷渓谷の奥に位置するため、昭和 20 年代はまだ車道が通っておらず※1、旅館の従業員や湯治客などは三ツ又からは徒歩で来ていました。現在は車道になっている中宮橋、湯の谷橋も元々は吊り橋でした。また、昭和 36（1961）年に三ツ又第一発電所が運転を開始するまで中宮温泉には電気が来ておらず、旅館の奥に共同水車を設けて自家発電を行っていました。

しかしながら、温泉街には 4 軒（山田旅館、西山旅館、木戸旅館に加え、昭和 9（1934）年以降新たに開業した宮村（みやむら）旅館の 4 軒、並びは現在と同じ）の旅館が並び、湯治客などでにぎわっていました。

図8　蛇谷川本流より温泉街への道
（国土交通省国土地理院「地理院地図」にルート等を追記して作成）

写真14　昭和30年代の中宮橋

写真15　昭和20年代の湯の谷橋

※1　三ツ又までは車で行けましたが、そこから先は徒歩となっていました。

小松砂丘（こまつさきゅう）と中宮温泉

湯治客でにぎわっていた中宮温泉でしたが、8 ページで紹介した小松砂丘も、この時代に中宮温泉を訪れた人の一人でした。小松砂丘は太平洋戦争終戦前後にかけて毎年湯治に訪れ、各旅館を渡り歩いていました。

小松砂丘は湯治に訪れては、中宮温泉の起源や旅館の誕生などを「中宮温泉之記」に記したり、中宮温泉の温泉宿のにぎわいや周りの自然を描いた「中宮八景」（本冊子裏表紙参照）を描いたりしました。宿賃の支払いの代わりに俳画を残していったと言われていますが、その文や絵からは中宮温泉を深く愛していたことが伺えます。

写真16　西山旅館と女将

写真17　西山旅館の囲炉裏と湯治客

写真18　中宮温泉の湯治客たち

写真19　上流から見た中宮温泉

写真20　中宮温泉の共用水車

写真21　水車小屋の中の発電機

7. 車道の開通と旅館の隆盛（昭和中後期）

車道の開通（昭和 30 年代）

昭和 30 年代以降は車道が徐々に伸びてきて、より容易に中宮温泉までアクセスできるようになりました。

昭和 32（1957）～ 33（1958）年にかけては、尾口第一ダム（三ツ又）から中宮温泉付近にかけて、蛇谷林道が開設されました。また、同時期に中宮温泉に村営の国民宿舎としてくろゆり荘が完成しました。その後、道路及び橋の整備が進み、昭和 40（1965）年頃からは、中宮温泉まで車で行けるようになりました。

そして、昭和 52（1977）年には白山スーパー林道（現：白山白川郷ホワイトロード）が開通すると、岐阜県側からも車で中宮温泉に来られるようになりました。

旅館の高層化と雪下ろしからの解放（昭和 50 年代）

白山スーパー林道の開通により多くの観光客が訪れるようになったため、中宮温泉は大きな変貌を遂げました。従来木造の旅館が立ち並んでいましたが、白山スーパー林道の開通に合わせ、多くの温泉客を受け入れようと旅館が拡充をはかり、鉄筋コンクリート造となりました。

なお、木造であった時代は冬は閉鎖し無人になる一方で積雪に建物が耐えられなかったため、毎年雪が締まって安定する 2 月ごろに雪下ろしに行っていましたが、鉄筋コンクリート造になると建物が雪に耐えられるようになり、雪下ろしから解放されることにもなりました。

写真22　昭和40年代の中宮温泉

写真23　中宮温泉の雪下ろし

（コラム）雪下ろしに行くルート（冬の道と「さるこ」）

雪下ろしに際しては、道中険しく雪崩の危険があるため、冬は夏とは違う道を通っていました。三ツ又第一発電所までは、概ね車道を通っていましたが、ここから先は発電所真裏の鉄管（送水管）を登り、左岸側の緩斜面を歩いていました。

しばらく進むと今度は左岸側が急峻になってくるため、現在の中宮温泉野営場あたりで川を渡り、右岸側に出ていました。中宮温泉野営場あたりには篭（かご）の橋（篭渡（かごわた）し）※1 が架かっており、それを使用して蛇谷を渡りました。この篭渡しは、中宮では「さるこ」と呼ばれていました。

現在この場所には吊橋「さるこ橋」がかかっていますが、これはその場所に篭渡し（さるこ）があったためにその名が付きました。その後は概ね車道に沿って歩き、中宮温泉まで行きました。

図9　中宮温泉へ雪下ろしに向かうルート
（国土交通省国土地理院「地理院地図」にルート・関連施設等を追記して作成）

写真24 「さるこ橋」の場所にあった「さるこ」

写真25　中宮温泉野営場の「さるこ橋」

※1　江戸時代、国境警備などのため庄川や神通川の上流（五箇山や猪谷など）にもかけられていた。中宮の「さるこ」の写真は昭和 40 年代のもので、少なくともこの年代までは使用されていたことがわかる。

8. 温泉街の衰退、そして試練を越えて（平成末期～令和）

温泉街の衰退、林道災害、そして新型コロナ

白山スーパー林道（現：白山白川郷ホワイトロード）の開通後しばらくは盛況を見せた中宮温泉でしたが、平成後期からは試練の時代を迎えることとなりました。

観光需要が低迷したこと等により、宮村旅館は平成 20（2008）年に、山田旅館も平成 22（2010）年に閉館しました。同じく木戸旅館も、平成 29（2017）年に閉館し、一時期は旅館が西山旅館とくろゆり荘の 2 軒だけとなってしまいました。

また、令和元（2019）年以降は、唯一のアクセスルートとなっている白山白川郷ホワイトロードで土砂災害による通行止めが相次いだことから、中宮温泉はその影響を受けました。

さらに、令和 2（2020）年からは新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が世界中で猛威をふるい、中宮温泉もその影響を受けました。感染防止対策と来客の減少、そして緊急事態宣言等の発令による営業制限に苛まれることになり、試練の時代となりました。

試練を越えて

平成後期から現在にかけて試練の時代を迎えている中宮温泉ですが、その中でも取り組まれている事柄、そして試練の時代を越えて再び動き出している事柄について紹介します。

令和 3（2021）年には、一時閉館していた木戸旅館については新たな経営者により 4 年ぶりに復活しました。また、旅館奥の露天風呂（薬師の湯）について、白山林道地元協力会※1 などの協力もあって「温泉床」※2 を設置し、足湯だけでなく湯気でも中宮温泉を楽しめるようになりました。

令和 5（2023）年には、前年 8 月の豪雨で石川県側より入れなくなっていた白山白川郷ホワイトロードが春から通行できるようになったこと、そして新型コロナウイルス感染症の感染症法上の扱いが 5 類に移行したことにより、中宮温泉の祭りである「薬師祭り」が 5 年ぶりに開催されました。中宮温泉の湯の恵みに感謝する祭事で、薬師如来の祭事だけでなく物産展も行われ、中宮に伝わる民謡である「へとつき音頭」※3 も披露されました。また、この年には中宮温泉の T シャツも作られ、製造元のくろゆり荘等で販売されました。

試練の時代を越えて、湧き続ける温泉とともに人々の営みも生き続けているのです。

※1　白山林道（白山白川郷ホワイトロード）の交通の円滑化や事故・災害の際の救助活動、その他林道の発展向上のため、地元商工会や消防団、中宮・尾添両区（町会）などで構成する団体。

※2　露天風呂の水面上に板を敷いたもので、熱気浴（いわゆる「オンドル」）として利用できる。

写真26　設置された温泉床

写真27　中宮温泉のTシャツ（胸の数字は源泉の温度）

（※コラム）西山旅館の 5 代目当主（現：会長）西山喜一（きいち）氏

昭和 20（1945）年に中宮で生まれ、幼少期は旅館を手伝うため、中宮温泉の分校に通っていました。昭和 63（1988）年に父である勝治（かつじ）氏の跡を継ぎ、西山旅館 5 代目当主（社長）となりました。現在、社長は息子の喜治（よしはる）氏が継いでおり会長をつとめてますが、春から秋は西山旅館の番頭に立つほか、中宮温泉の振興のため日々精力的に活動されています。

本誌の執筆にあたっては、中宮温泉の歴史や温泉に関わる様々な事象についてご教授いただき、また主に昭和 20 年代から 40 年代の貴重な写真を多数提供いただきました。

写真28　西山旅館会長・西山喜一氏

※3　「へと」とは中宮の言葉で泥を、転じて建築工事の際に基礎地面を搗（つ）き固める道具を指し、唄う際には装飾された「へと」を大人数で持ち、唄に合わせて「へと」を搗くように踊ります。

9. もう一つの秘湯「親谷の湯」

皮膚に良い滝見の秘湯

中宮温泉がある蛇谷峡谷には、もう一つの温泉があります。「親谷（おやだに）の湯」と呼ばれているこの温泉は、白山白川郷ホワイトロードの有料区間内に位置しており、蛇谷休憩舎では姥ヶ滝を正面に足湯と露天風呂を楽しむことが出来ます。

この温泉は古くから皮膚の病に良いとされ、加賀・飛騨両側から湯治客が来ていたといわれています。持ち帰って外用薬の代わりに使用する人もいたそうです。

写真29　蛇谷休憩舎の足湯と姥ヶ滝

写真30　姥ヶ滝と露天風呂

川から湧き出る湯、そして噴泉塔

親谷の湯の周辺は川岸の至る所から高温の湯が自噴しており、川水と混ぜ合わせて足湯等を作って楽しむことが出来ます。

また、蛇谷休憩舎から少し上流部に歩いて河原に降りると、温泉成分が空気に触れて固まってできた噴泉塔を見ることが出来ます。この噴泉塔は成長が早く、令和3（2021）年の春先に一度根元から折れましたが、わずか2年で50cm程度まで成長しました。

写真31　元々の露天風呂

写真32　蛇谷休憩舎奥にある噴泉塔

峡谷（きょうこく）の桟道（さんどう）、そして蛇谷荘（じゃだにそう）

現在は車で容易にアクセスできるようになりましたが、昭和52（1977）年の林道開通前は中宮温泉から親谷の湯まで約4kmに渡って桟道（木道）が伸びており、それが唯一のアクセスルートとなっていました。

長い険しい道のりとなるため、近くには宿泊施設「蛇谷荘」が設けられていました。蛇谷荘は昭和40（1965）年に建設され、蛇谷園地の駐車場から急坂を下りきったところにありました。残念ながら昭和56（1981）年の豪雪で倒壊してしまいましたが、現地には広い平坦な場所があり当時施設があったことが偲ばれます。

蛇谷峡谷の長い桟道を歩いて滝を見ながら温泉に入る、この道は中宮の子どもたちの遠足コースになっていました。

写真33、34、35　中宮温泉から親谷の湯へ向かう道

写真36　蛇谷荘と子どもたち

写真37　湯につかる子どもたち

おわりに

白山麓の最上流部の秘湯である中宮温泉について、起源にまつわる伝説および安土桃山時代からの人々の営みを知っていただけたでしょうか。また、昭和の時代からは写真を多く掲載しましたが、その歴史と合わせて見ることで当時の様子を生き生きと感じることが出来たかと思います。

中宮温泉は湯治の温泉として昔から評判は高かったのですが、行く道は険しく雪崩や土砂災害などの自然災害と戦いながら営みを続けてきました。江戸時代以前は現地に管理者は常駐していませんでしたが、明治時代からは常駐しての旅館営業が始まり、大正時代には自然災害に翻弄されて場所を転々とするも、昭和時代には車道の開通に伴い発展を遂げました。そして、令和時代を迎えた現在もなお、湯はこんこんとわき続けており、林道災害やコロナ禍を乗り越えて温泉旅館が営まれています。中宮温泉に行かれる際は、その歴史を感じながら湯に浸かってみてはいかがでしょうか。

また、もう一つの秘湯として紹介した親谷の湯についても、かつて蛇谷の川沿いに桟道や宿泊施設があって中宮の子どもたちの遠足コースになっていたことなどに思いを馳せていただければと思います。歴史を知った上で現地に赴けば、白山白川郷ホワイトロードの絶景もまた深みをもって味わえるのではないでしょうか。

図10　中宮温泉へ行く道の変遷（江戸時代～現在）

本誌を作成するにあたり、下記の文献資料を参考にしました。各文献の編集に関わられた方々には感謝・お礼申し上げますとともに、図面や写真等を提供いただいた方々、また情報収集に協力していただいた方々にも合わせてお礼申し上げます。

参考文献　明治時代　森田柿園「加賀志徴」
昭和 10（1935）年　池上鋼他郎「白山連邦と渓谷」（宇都宮書店）
昭和 44（1969）年　田中敏子「峡谷の犬鷲－山田美農里の生涯－」（甲陽書房）
平成 2（1990）年　吉野谷村「吉野谷村小百科事典」
平成 5（1993）年　石川県「白山の人と自然「人文編」」
平成 9（1997）年　石川県「石川県林業史」
平成 15（2003）年　吉野谷村「吉野谷村史（通史編、資料編（近現代））」
平成 16（2004）年　吉野谷村「図説　吉野谷村の歴史」
平成 25（2013）年　北陸中日新聞「老舗旅館に文人の足跡　中宮温泉愛した俳画家・小松砂丘」
平成 26（2014）年　山﨑久栄「湯の道よ永久に　岩間温泉物語」（能登印刷出版部）
令和元（2019）年　文春オンライン
「携帯の電波は入らない、猿がお湯を舐めにくる　それでも浸かりたい“エクストリーム温泉”」
令和 4（2022）年　合同会社空飛ぶネコホームページ
「誰でも美味しくヘルシーに調理できる「神なる温度＝63℃」とは？低温調理器･BONIQ で魅力を実演」
日本銀行金融研究所「貨幣博物館」ホームページ
「江戸時代の 1 両は今のいくら？―昔のお金の現在価値―」

協　力　白山林道石川管理事務所（（公財）石川県農林業公社）、国土交通省金沢河川国道事務所、白山市観光文化スポーツ部施設管理課、（一財）白山市地域振興公社、（一社）白山市観光連盟

写真提供　西山喜一氏（西山旅館、写真 9、12、14 ～ 23、36、37、裏表紙）、西山喜治氏（同左、写真 3、5）、永田泰氏（くろゆり荘、写真 6、27）、山田繁二氏（山田旅館、写真 11）、（故）外一夫氏（中宮住民、写真 24、33 ～ 35）、（一財）白山市地域振興公社（写真 25）、白山林道石川管理事務所（（公財）石川県農林業公社、写真 29、30、32）、石川県立図書館電子資料（写真 13）

聞き取り　西山喜一氏（西山旅館）

白山の自然誌　44
白山の秘湯・中宮温泉の歴史

発 行 日　令和 6 年 3 月 29 日
文・構成　北原　岳明
発　　行　石川県白山自然保護センター
〒 920-2326 石川県白山市木滑ヌ 4
Tel. 076-255-5321　Fax. 076-255-5323
http://www.pref.ishikawa.lg.jp/hakusan/index.html
E-mail : hakusan@pref.ishikawa.lg.jp
印　　刷　株式会社 中川印刷